「共に苦しみ、共に喜ぶ共同体」

10月に入り、教会の玄関前にあるキンモクセイが開花の時期を迎え、樹木の上の方をご覧になるとオレンジ色の可愛らしい花がたくさん咲いているのが分かります。たまに家の芳香剤として「キンモクセイ」と表示してあるものを近所のドラッグストアで購入することがありますが、植木の水撒きをしながら、甘くほのかなキンモクセイの香りが漂ってきますと、やはり本物は違うなあと思います。その美しい香りを通して、夏から秋へと移行する季節の移ろいを感じ取ることができ、コロナ禍にあった今年度、上半期を振り返る穏やかな気持ちを与えてくれるというのは不思議なものです。先週一週間、大阪では感染者数が50名前後で推移している一方で、東京の方では中々収まらず、高い水準で推移しているとの事で、今後、晩秋から初冬にかけて最拡大することなく、下降線を辿ることが出来ますようにお祈りをしたいと思います。

さて、先週より第一コリント書12章に入っていますが、前回の12章の前半部分においては、主を信じる私たち一人一人が神様から各々等しく分け与えられる霊的な賜物について述べられていました。神の霊による賜物(能力)は様々あり、病を癒やす力や奇跡を行う力、…霊を見分ける力 etc、多様であるが、その出所は同じ唯一の神様であるという事が書かれていました。本日の12章12節からは、教会を私たち人間の体に喩えて、1つの体でありながらも、そこに多くの部分があることを教えています。また、13節では、「一つの霊によって、わたしたちは、ユダヤ人であろうとギリシア人であろうと、奴隷であろうと自由な身分の者であろうと、皆一つの体となるために洗礼を受け、皆一つの霊をのませてもらったのです。」と語っており、真の神様を信じる私たち一人一人が、人種や肌の色の違い、社会的な身分の違いを超えて、目には見えないけれども確かに存在するキリストの体なる教会にしっかりと繋がっているということが述べられています。パウロはキリストを主と告白する全ての者が、民族的・宗教的な壁を超えて、一つの御霊によって一つのからだにバプテスマ(洗礼)されたのであると教えています。

続く15節以降22節まで、パウロは教会が様々な立場や弱さを持つ人々を含めて、主にある一つの信仰共同体であることを教えるために、人の体の様々な器官を擬人化し、その働きや特性の必要性について、絶妙な喩えをもって教え諭そうとしています。パウロは「たとい足が私は手ではないから、体の一部ではない」と言い合ったところで、体の一部でなくなる訳ではありません、と言います。また、もし耳が、「私は耳で、目ではないから、体の一部ではない」などと言うならば、どうでしょう。そんなことで耳が体から離れることが出来ますか？とも語っています。考えて見れば分かるでしょう、もし体全体が目であるならば、どこで聞くことが出来るのでしょうか？また、もし体全体が耳であるならば、どこで匂いをかぐのでしょうか？と、各部位のどの器官も無駄なものは存在せず、他の器官と有機的なつながりがあることを訴えかけています。そのように、神様が私たちの肉体を各器官の働きと機能に応じて、適材適所、配置されてお造りになったように、教会にも様々な働きと賜物を与えられている一人一人がいて、一つのキリストの体なる教会を構成しているのであると教えています。パウロが人間の手足や耳や目に喩えて、このような内容について語らなければならなかった背景には、おそらく教会内部において、何らかの分断が生じていたのだと思われます。能力のある者たちは、自らを誇って他者を見下げる一方で、弱い立場にある人たちは自己を卑下して教会の交わりから距離を置く人たちもいた

のだと思います。

それ故、パウロは「…体の中で他よりも弱く見える部分が、かえって必要なのです。」(22節)と告げており、各自が神様から公平に与えられた賜物とその働きを正しく理解して、高慢な態度をとったり、自己を必要以上に卑下し、縮こまる必要はありませんと述べています。また、主イエスの流された尊い血潮によって贖い出された私たち一人一人は、「もし一つの部分が苦しめば、すべての部分がともに苦しみ、もし一つの部分が尊ばれば、すべての部分がともに喜ぶのです。」(26節)と言われており、お互いを気遣い、労り合うことの大切さについても教えられています。神の家族のメンバーとして苦しみや痛みを共に分かち合い、兄弟姉妹の誉れは我が事のように、共に喜ぶ者とされていると言われていきます。現実的な問題として、この聖句を私たち自身の日常生活に置き換えて実践しようとした時に、前者よりも後者の方が私たちの自然な感情として、困難を覚えることが多いのではないのでしょうか？何故ならば、イエス様を信じて、主の救いに招き入れられた私たちには、相変わらず多かれ少なかれ、嫉妬心というものが存在し続けているからであります。私たちの生まれながらの性質によっては、真心から他者の幸せを自分のことのように喜び祝うことは、正直、大変難しいことではありますが、パウロは共に神様に愛されている一人一人として祝福し、喜びをもともに分かち合うようにと勧めているのであります。

27節から28節までには、初代教会の草創期に多種多様な働きを担われた人々について具体的に書かれています。神様によって立てられた使徒や預言者、教師をはじめとして、病気をいやす賜物を持つ者や援助する者、管理をする者 etc、その職務上の能力に応じて、教会の徳を高めるため、また教会全体の益のために用いられるべきことを教えています。「預言者」と言いますと、未来に起こるべき事を前もって予知する者というようなイメージがあるかも知れませんが、ここで言う「預言者」というのは、神の霊に導かれて主の御心を宣べ伝える宣教者と言い換えても良いかと思えます。時の権力者が圧政により国民を虐げているとするならば、その横暴さを指摘し、警鐘を鳴らす役目を担っているのが、神様によって立てられた預言者であると言えます。また、「援助する者」(補助者)というのは、貧困や病などの悩みを抱えている人々を具体的な形でサポートする役目を担っていた人々と思われれます。「管理をする者」(管理者)というのは、現代の教会で言う役員や執事のような事務的かつ実務的な働きを担っていた人々であると言えます。そして、本章の最後の所では、「皆が使徒であろうか。皆が預言者であろうか。…」(29節)と繰り返し問いかけており、神様が私たち信仰者にお与え下さった賜物(能力)と働きは多種多様であり、お互いに依存し合う関係性にあることを教えています。

教団のカレンダーでは、本日から今週24日(土)まで、信徒伝道週間となります。各々、神様から与えられている賜物を出し惜しみすることなく、活か合い、各々の遣わされる場所において、それぞれの仕方です主を証しし、キリストの福音を宣べ伝えてゆきたいと思えます。また、主が病める人々や社会の片隅に追いやられている人たちの心の友となり、救いの手を差し伸べられたように、私たちも心に悩みを抱えている人々に寄り添い歩むことが出来ますように。この月の後半も主が私たちと共にいて、御霊の実を豊かに結ばせて下さいますようお祈りを致します。